ひとつのきっかけ

そぅイヤー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひとつのきっかけ

【Ｎコード】
Ｎ５１５８Ａ

【作者名】
そぅイヤー

【あらすじ】
みんなにみてほしくて投稿しました。暇があったら見てやってください。

きっかけ

俺は友達とコンビニにいった。
それの帰りに、
「お前は彼女つくらんの？」
いきなりの言葉にたばこを吸ってた俺は噎せてしまった。それから落ち着いて、
「できない！きっかけないし！」
「彼女にメル友紹介させてやるよ。いる？」
「俺でもキモいしなーそれでもいいなら。」「まぁ聞いてみたるわ！まってな。」
そんな会話をしながら帰っていった。

メール

友達の彼女に女を紹介してもらった。
それは友達がくれたチャンスだと思い俺はその子とメールをした。
俺のはその時かなり楽しかった。一年近く女の人とメールなんてしてなかったし彼女がほしかったしな。だけど向こうは違ったみたいだ。3日目の夜部活が終わり俺はメールをしてみた。だがいくらたっても返事が帰ってこなかった。多分向こうはうざかったのだろう。メールを返すのが遅いしメールが短文で絵文字もすくなかったし。
それから俺は2日たってから夜友達の家にいった。友達は俺が悪いはずなのに俺を気遣ってくれて、「それは相手が悪いだろ！馬鹿じゃん相手！」
みたいな感じで俺に気遣ってくれた。
正直嬉しかった。相談してよかったっても思った。
それから友達とギターのゲームをしていた。たばこを吸いながらやっていた。そうすると別の友達からメールが来た。
『もし仮に自慢話をする。○○はあれなんだよ。みたいな感じでいうじゃないか。いってるがわからすれば感想がほしいだろ？それに相手が知らないからって事で優越感もある。だがお前は感想も無しで優越感までも壊そうとする。それがお前の中ではアピールかもしれないが向こうにしてみればけなされた同然なんだよ。その辺考えな。』
俺はそのメールを見て自分に足りないものがあることを知った。だがそれがなにかわからない。自分がいた。自分に足りないもの。その時はわからなかった。
俺は明日があるから帰ろうとする。
俺は帰りながら友達にいった。
「紹介してもらってありがとうって言っておいて。」
俺はある出来事があってから女と会話とかするのが恐くなった。俺

は自分に自信がなく体格的にいい体格じゃなくキモい部類に入る人間だ。多分そんなこともあったから恐怖症になったんだと思う。
そうすると友達から、
「自分で謝りな。にげんな！」
とね。
俺はなぜか逆切れしてた。
「それが出来ねーからお前にいったんだよ！」
そして友達は気分を悪くしたのか、「今日帰るわ。じゃあな。」
俺は何も言えなかった。たぶん恐怖症のせいにして逃げていたんだから何も言わなかった。
その日雨がすごかったが傘を閉じて考えながら帰っていった。

考え事

帰ってから友達が言ったことを自分の中で考えていた。
自分の何がいけなかったか、これからどうすればいいのか。
とにかく自分で謝ろう。逃げちゃいけないし。

『最近メール返すの遅くてごめんねぇ←ちゃんと早く返すようにするから！マジでごめんねぇ！』

まぁこんな文でいいか。

『メール送信しました。』
よし。これで返ってこなかったら諦めよう。
そのままお風呂に入ることにした。
お風呂につかりながらメールが返ってくるか考えていた。
それで風呂から上がり台所に行って牛乳を一気飲みして部屋に戻った。
部屋に戻ってきた俺はすぐに携帯を見てみる。
なにもきていない。
「やっぱり来るわけないよなぁ……」

でもセンターにいってるかもしれない。
念のためセンター問い合わせをしてみた。

『新着メールはありません。』

「やっぱりきてない…か。」
もう諦めよう。自分が悪かったんだし。

明日は大会だしそのまま俺は髪をかわかし眠りにつくことにした。
そして3時頃。俺は携帯が鳴っているのにきがつき起きてチェックをしてみた。
しかしそれは連れからでメル友ではなかった。
「なんだよ。期待してたのに。」

『3時11分　圭介』

『明日、6時30分にいつもの神社に集合な。』

俺は手短に『分かった。』と返事をし寝ることにした。

そして朝。

また携帯の音で目が覚める。

『6時01分　圭介』

『おきてっか？早くこいよ。』

そのメールはシカトして飯を食べに台所に行った。

「おばちゃんおはよー」

「誠君おはよう。今日は大会なんだから遅れないように早くご飯食べて行きなさい。」

「はい。」

いちよう俺は親戚のおばちゃん家に居候と言う感じで住ましてもらっている。
親は最近離婚し両方実家に帰ったからだ。
学校は今のまま行きたいので、おとぅの兄弟のおばちゃんに頼んで住ましてもらってる。
俺は簡単にご飯を食べて、部屋に戻り行く支度をしようとした。
そうしたらいきなり携帯がなりだした。
「誰だっけこの音楽。まぁいいや。あとから見るか。」
そのまま支度をしておばちゃんに電車賃を貰い向かうことにした。
チャリをこいで約束した神社まで5分。今から行っても早いと思った俺はジュースでも買って行くか。と思い自販機に立ち寄ることにした。
そして小銭を自販機に入れようとすると、
「誠〜！」
「おー昌平か。」
「一緒に行こうぜ。」
「オッケー！圭介に言ってみるわ！」
こいつは小さい頃から中がいい昌平。
こいつも一緒のサッカー部に入っている。
その時メールが来ていたのを思い出した俺は確かめることにした。

『６時１０分　あさみ』

『そんな謝らないで！うちも嫌で返せなかったんじゃなかったから！充電器を無くしてて←←だから気にしないで！』

それは圭介から紹介してもらったあのメル友だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5158a/

ひとつのきっかけ

2011年1月23日02時57分発行